

SPECIAL 特集 国際交流 EDITION

パレットに並ぶ貴重な色彩
スペインのオレンジ

UPV CAMPUS : VALENCIA, SPAIN▶

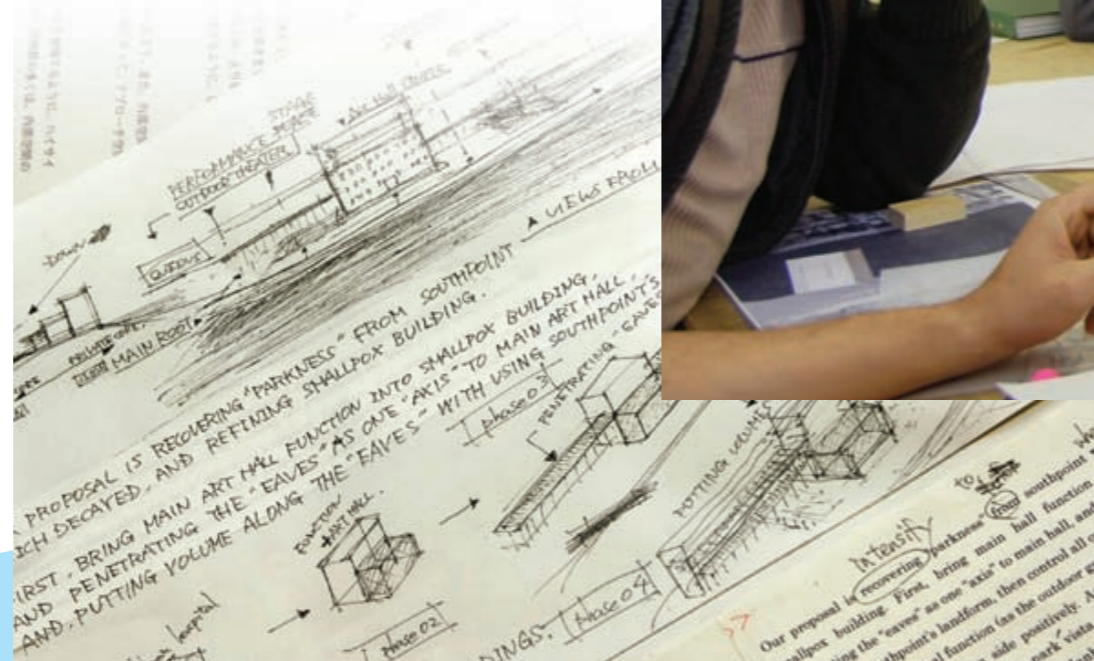
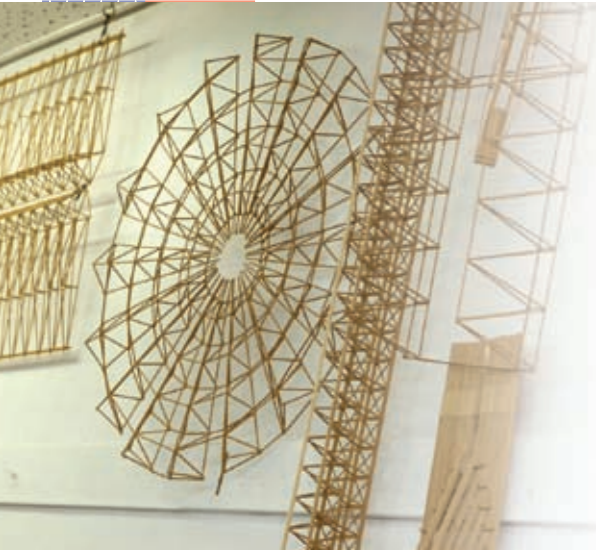
国際化というコトバと留学の変容

「国際化」というコトバが流行っている。大学では「国際的通用性」とか「仕事で使える英語教育」とか言われている。この手の用語に僕が感ずるのは、外国を無意識に先進国に限定し、そこに欧米諸国をあてはめ、無批判にバラ色に染めあげて見る、妙なコンプレックスの痕跡だ。おそらく、かつてドルが360円だったころ、日の丸を背負って「彼の地の進んだ学術を吸収してこよう」と決意したエリートたちの感覚が、指導者たちの思考を今だに曇らせているのだろう。

実情はもうとっくに違う。もはやどんな人も日本人であるだけでは十分ではない。どこかの国に赴きその文化に触れることなど、明日起こっても不思議はない。日本であって、一日外国人の姿を目にしないで過ごすことなどほとんどない。国際化は事実なのだ。

妙な国際コンプレックスこそ国際化の妨げなのだと思ふ。本当のところ「仕事で使える英語」などごく基本的な能力だし、「彼の地の進んだ学術を吸収してこよう」という信条は自らの能力をいたすらにおとしめる効果しかもたない。実際に必要とされるのは、スペイン語だったりマレー語だったり、あるいは単に根性だったりするのだ。

だから学生は、学位課程入学と貧乏旅行を折衷して、交換留学へと移行してきた。先進国・途上国の先入観なく活発に赴いて、むしろ自分の文化や考え方や学問を逆照射し、そして「やって行けそうだ」という自信を掘り出してくるのだ。パレットに並んだ各国・各文化の彩りの幅こそが、現代の国際化なのであり、そのことを今の学生は分かっている。スペインのオレンジ色も、我々の手にした貴重な色彩のひとつなのだ。



三重大学工学部・助教授
富岡 義人
Tomioka, Yoshito

[URL] <http://alvar.arch.mie-u.ac.jp/tomioka-lab/min.html>